新着案内

町田の文学

第 45 号　2020.2.1 発行　町田市民文学館ことばらんど

別所真紀子著『浜藻崎陽歌仙帖』刊行

江戸期・町田ゆかりの作家
俳諧師・五十嵐浜藻を
めぐる物語
＊
女性だけの連句集
『八重山吹』刊行に至る
西国行脚の旅を小説化

『浜藻崎陽歌仙帖』
別所真紀子／著
幻戯書房　2019. 12

虚と実のあわいを描く物語

江戸期の町田ゆかりの作家、俳諧師・五十嵐浜藻（いがらしはまも）を主人公とした小説『浜藻崎陽歌仙帖（はまもきようかせんちよう）』が刊行された。

作者の別所真紀子氏は、これまでも浜藻を主人公とした小説を手がけており、芭蕉やその弟子を描いた「俳諧小説」の新境地を開いた作家としても名高い。二〇一六年には、『江戸おんな歳時記』（幻戯書房　二〇一五）で第六七回読売文学賞随筆・紀行賞を受賞した。

既刊の浜藻を主人公にした作品（短編二篇・長編二冊）は、史上初の女性だけの連句集『八重山吹』刊行後の浜藻を描いたものだったが、今回遂に待望の『八重山吹』刊行に至る旅を描いた小説が登場した。

女性だけの連句集を、浜藻がどのような思いで編もうとしたのか、どんなドラマがあったのか、周辺で起きる出来事の謎解きも交えながら、虚と実のあわいを描く別所文学の世界に引き込まれていく。

五十嵐浜藻をご存知ない読者も、ぜひこの機会に小説を楽しみながら、わが町の誇る俳諧師を身近に感じていただきたい。

「比類なき女性俳諧師」五十嵐浜藻

物語の紹介に入る前に、五十嵐浜藻とは、どのような人物だったのかを見ておこう。

浜藻は一七七二(安永元)年、武州大谷村(現・町田市南大谷)の名主、五十嵐家の長女として生まれた。若くして、当時俳諧の三大家と言われた井上士朗、夏目成美、鈴木道彦らと親交があり、俳諧番付などにも登場する、広く知られた実力ある俳諧師だった。父は八代目当主、伝兵衛孝則、俳号を梅夫(ばいふ)と言い、『八重山吹』を刊行するに至る六年間の西国への行脚は、この父と出かけたものであり、梅夫もまた全六巻にも及ぶ連句・発句集『草神楽』を刊行している。

浜藻の人柄を表すのによく引用されるのが、次の二句である。

門口や先(まず)愛嬌のこぼれ梅　一茶

うぐいすや田舎廻りのおちゃっぴい　鶴老

親しくしていた小林一茶が鶴老という俳人と大谷村を訪ねた時のものと言われている。読む者も思わず微笑んでしまう句からは、二〇〇年前、南大谷に暮らしていた、笑顔のかわいらしい女性がありありと浮かび上がる。

浜藻肖像(『万家人名録』国文学研究資料館蔵)
句は「つゆよりもさきにのほるやけふの月」

五十嵐浜藻(いがらし　はまも)
1772～1848
大谷村出身の俳諧師。

時は文化三年、長崎へ！

浜藻三三歳、父・梅夫と西国行脚へと旅立つ。尾張(静岡)から備後、備中(現在の広島県、岡山県)を経て長崎へ赴き、小豆島へも渡っている。さらに帰路、近江、尾張、津、伊勢などを巡り、京都で『八重山吹』『草神楽』を板行。実に六年にわたる旅だった。

その最西端の歌仙興行地、長崎での出来事を小説化したのが「浜藻崎陽歌仙帖」である。「崎陽」とは長崎の漢文風の異称。

長崎では、当時大変な権威ある立場の「町年寄」であった、廻船業を営む豪商、久松家に寄寓する。その久松家隠居(と言っても壮年の)の妻の名は「佐太」。「小柄でふっくらとした丸顔の」女主人は、浜藻との付合(つけあい)が『八重山吹』冒頭の歌仙に掲げられている、その人である。

長崎に逗留している間に浜藻は佐太に付合の手ほどきをする。二人の歌仙が巻き上がるまでを描きつつ、これまでの浜藻を主人公にした作品同様、周囲の人々の人間模様や謎が、浜藻の機転によって解き明かされていく。そして、そのいずれもが、人が抱く「心の闇」に分け入っていく話であり、誰もが大なり小なり抱えている「闇」をあるがままに肯定し、主人公である浜藻がそこに心を寄せていく。それが別所文学の魅力であり、またそれは、人のありようを描く「俳諧」の世界に通じるものであるように思われる。

『八重山吹』原本　天・地
(富山県立図書館　志田文庫蔵)
本書はほかに岡山市立中央図書館燕々文庫とオランダ・ライデン大学シーボルト日本書籍コレクションの中に現存。

謎多き浜藻の人生を描く

六年にもわたると言われる西国行脚は史実であり、婿取りをした跡継ぎ娘とはいえ、名主の妻が長期間家をあけることができた、という

のは、現代の私たちにも驚きであり、謎である。また、『八重山吹』に序を寄せた近江の俳諧師、奥村志宇からの「噂で子どもをもうけたと聞きました」という浜藻宛の書簡が残っている（町田市立自由民権資料館蔵）が、詳細は分かっていない、などなど、浜藻という人の生涯には、想像力を掻き立てられる謎も多い。

「もしおなごばかりの付合集が出来たなら、それは後の世に遺るかも知れない。子を生さぬ浜藻にはそのような手だてしか生きた証しを遺すことができないのだ」（二二九ページ）――こうして編まれた『八重山吹』は、謎の多い生涯ながら、揺るぎなき浜藻の業績として屹立している。

＊　＊

浜藻と佐太の付合は、
花による女所といふそらや　浜藻
梅のにほひもたのむ春風　佐太

別所真紀子　一九三四年生まれ。
詩人、作家。俳諧研究誌「解纜」主宰。

という、何ともたおやかな、そして未来への希望を感じさせる花の句と挙句（あげく）で終わる。

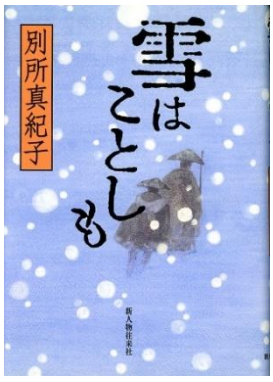
この物語では、小説としての面白さもさることながら、浜藻が佐太や回りの女性たちに付合を教える場面、父や俳人たちと歌仙を巻くといった場面を読んでいくと、読者もごく自然に、連句の基本の考え方やルール（式目）を知ることができる。別所文学にはこうした俳諧を巡る多角的な世界があることも魅力の一つである。

この機会にぜひ五十嵐浜藻の世界、別所真紀子の世界を味わっていただければと思う。

別所真紀子氏 主な著作リスト

『「言葉（エクリチュール）」を手にした市井の女たち』
（オリジン出版センター　1993.3）
『別所真紀子俳諧評論集　共生の文学』
（東京文献センター　2001.9）
『芭蕉経帷子』
（新人物往来社　2002.10）
『古松新濤』（都心連句会　2006.6）
『数ならぬ身とな思ひそ』
（新人物往来社　2007.8）
『江戸おんな歳時記』（幻戯書房　2015.9）読売文学賞随筆・紀行賞受賞
『詩あきんど其角』
（幻戯書房　2016.8）

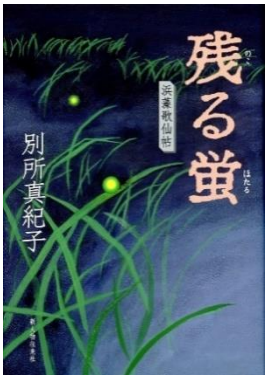
別所真紀子著 浜藻が主人公の小説



『雪はことしも』
短編「浜藻春風」
「浜藻歌仙留書」所収
新人物往来社 1999.9
表題作で歴史文学賞受賞

『つらつら椿　浜藻歌仙帖』
新人物往来社
2001.6

『八重山吹』を刊行の後、江戸は多田薬師境内にある夏目成美の別宅で一座する、浜藻と連衆の人々との暖かい交わりや心情を描く。



『残る螢　浜藻歌仙帖』
新人物往来社
2004.4

『つらつら椿』の続編。寄り添い合う連衆の身の上に様々な出来事が起きる。連座を閉じて名主の妻としての務めを果たそうと決意し、未来を見据える浜藻を描く。

〈貴重雑誌をめぐる物語〉

文学館の貴重書庫には、文学史的に重要な雑誌や、町田ならではの地域文芸誌など、約八七〇タイトル、一万一千冊余が所蔵されています。日頃、あまり目に触れることのないそれらの雑誌から、主なものを順次ご紹介いたします。

その五　詩誌「祝火」

編集：扇谷義男・川田総七
編集兼発行人：本橋康二
発行所：青林堂書店
刊行頻度：隔月刊
所蔵巻号：第一冊（一九三五・昭和十年二月十日）／第二冊（同年四月十日）／第三冊（同年六月十日）。

川田総七と「祝火」

町田ゆかりの詩人、川田総七をご存知でしょうか。

戦前一九三〇年代に、「椎の木」「レスプリ・ヌーボー」「VOU」「文芸汎論」といった、当時詩壇をリードした著名な詩誌に次々と作品を発表し、新鋭として注目されながらも、一九五二(昭和二七)年、三七歳の若さで結核のために亡くなった詩人です。

総七は、いま町田ジョルナがある場所に一九六〇年代半ばまであった造り酒屋、川田酒造の長男として、一九一五（大正四）年に生まれました。若い頃から詩歌に親しみ、一八歳で初の詩集『希臘（ギリシャ）の海』(私家版)を刊行、二二歳で『若き蛇』(青林書房)、二二歳で『窓』(昭森社)と、三冊の詩集を残しています。

今回ご紹介する「祝火」は、その川田総七が二〇歳の時に、五歳年長の詩人、扇谷義男とともに創刊した詩の雑誌です。文学館が所蔵する冒頭の三冊は、開設準備の過程で古書店から購入したものですが、国立国会図書館のデータベース等で調べても、この雑誌を所蔵する施設は、当館以外に見当たりません。

「祝火」のモダニズム

誌名は、「いわいび」と読むのでしょう。各号の表紙下部に「FEU DE JOIE」（「篝火」を意味するフランス語）の文字が置かれ、第一冊と第二冊の扉裏には、それぞれマックス・ジャコブとアポリネールの詩の一節が掲げられています。

第一冊に総七は、次のような詩を寄せています。

スクリーンの顔

葩（はな）のやうな羞恥が私を烈しく引きはなした／充血した顔が私を喝采する／私を見つめるものが私から遠のいて行った／しばらく私は空間で私の中心を見失う／技（ママ）技は破睨み／私はその下に立つてゐる／暗い世界から明るい世界を／私は小さな鍵穴からのぞく／私が軽妙な身振りであるために

この難解な詩を見ても、「祝火」が昭和初期のモダニズム運動に強く影響された詩誌であることが分かります。モダニズムとは、従来の伝統的な抒情詩やリアリズムに対する、象徴主義やシュルレアリスムといった新しい文芸思潮のことです。

全頁を同じ厚手の用紙で仕上げたモダンな装幀、余白を贅沢に使った頁組などからも、若い詩人たちの詩誌創刊に賭ける意気込みや自負のようなものが感じられます。

因みに、発行所の青林堂書店の住所は、総七が翌年刊行する第二詩集『若き蛇』の版元、青

林書房と同じ「中野区住吉町五八」となっており、発行人も同じ本橋康二です。

作品名とその作者

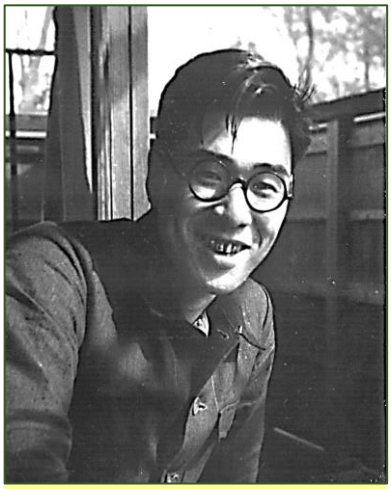
参考までに、各冊に収められた作品名とその作者を記しておきましょう。

【第一冊】

Andante.（富士武）／門の頁（扇谷義男）、スクリーンの顔／負傷（川田総七）／詩人としてのD・H・ローレンス（富士武）／連峰（石上波津夫）／北地の吐息（鈴木梅子）／日曜日ー或る田園にて（本島光尚）／鶏舎のエピソード〈会話・狂暴〉（川田総七）

【第二冊】

肖像（阪本越郎）／ミルクの河（本島光尚）／苑（ロイ・キャムベル 富士武訳）／饑餓の手／圏の中（扇谷義男）／土（石上波津夫）／マドリガル（富士武）／鷗／秘法（川田総七）／Roy.Campbellに就て（富士武）



川田総七（1915～1952）
下村照路や八幡城太郎らとも交友し、詩作に励んだ。俳句集『庭柴』（1939）も刊行。

【第三冊】

五月の果樹園（石上波津夫）／スエズ 他二篇（川田総七）／懐疑的な侵蝕もあった 他一篇（三野亮）／天の係蹄 他一篇（扇谷義男）／祈る影ら（本島光尚）／猫の舌　一つ一つ蕪雑な時間（川田総七）／半日の作文（扇谷義男）／近頃不愉快なこと（富士武）／恢復期の手紙（本島光尚）／余白（総）

もうひとりの編集人、扇谷義男は横浜生まれ。『願望』『潜水夫』『仮睡の人』などの詩集があり、一九五一年には第一回H氏賞の次点、七六年には第二五回横浜文化賞などを受賞しています。

鈴木梅子は、福島県生まれ。一七歳で結婚し宮城県白石市へ。三二歳で堀口大学に師事し、一九二〇年代末から三〇年代にかけて、「パンテオン」や「セルパン」といった詩誌に作品を発表。のちに昭森社から詩集『殻』（「北地の吐息」所収）や『をんな』などを刊行しています。

阪本越郎は福井県出身。遠縁に永井荷風や高見順を持ち、詩集に『雲の衣装』『貝殻の墓』などがあります。当時すでに名の知られた詩人で、川田総七の第二詩集『若き蛇』に序文を寄せるなど、総七が敬慕していた人物です。

富士武、本島光尚、三野亮の三人も詩人で、やはり一九三〇年代の詩誌や合同詩集に作品がいくつか散見されますが、詳しい経歴は分かりません。石上波津夫については、全く手がかりがありません。

青春の記念碑として

「祝火」は当館以外にその所在が確認できないばかりか、戦前の詩誌に関する文献類にも、今のところその名前を見出すことはできません。多くの詩誌がそうであったように、おそらく第三冊を最後に刊行は中絶し、そのまま人びとの記憶からも消え去ってしまった、ということなのでしょう。

第三冊巻末の「余白」冒頭に、総七は「△祝火は僕等の慰安の為には存在しない。要は僕等の光栄、僕等の武器、僕等の運動の為にだけ存在する。／△僕は、この雑誌に真の愛読者を三人だけほしい。／（以下略）」と記しています。

総七の死の前年、河出書房から刊行された中野重治編『日本現代詩大系 第一〇巻〈昭和期三〉』には、安西冬衛や北園克衛らの詩に伍して、総七の第三詩集『窓』から「地平線」「秘密」など三篇の作品が収録されています。

それはあたかも早逝の詩人を悼んで、詩壇の片隅に建てられた墓標のようですが、この「祝火」もまた、ひとつの時代をひたむきに生きたひとりの詩人の、青春の記念碑に違いありません。

（当館元館長　守谷信二）

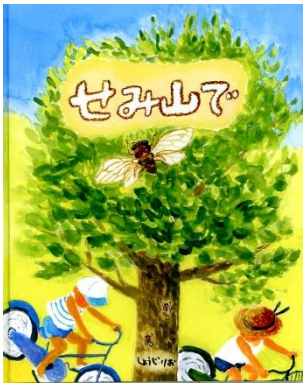
（注：引用の旧字は、読みやすいよう一部新字に変えています）

新　刊　紹　介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。
著者紹介は「著者略歴」などをもとに作成しています。

『せみ山で』

しょうじ りお／作　りんご舎　2017.9



夏休み。セミの誕生に出くわした「ぼく」は、地中で長い年月を過ごすセミの幼虫に思いを馳せる。仲良しとの別れもあった、ちょっとさみしい夏を、力強いタッチで描いた作品。雨のようにセミの声が降り注ぐ最後のシーンが美しい。製本もすべて手作りの絵本。二〇一七年・第三九回講談社絵本新人賞最終候補。

『おかあさんにカーネーション』しょうじ りお／作　りんご舎
2012年・第34回講談社絵本新人賞最終候補。

『くるまでおでかけ』しょうじ りお／作　りんご舎
2011年・第33回講談社絵本新人賞佳作。

しょうじ　りお
山形県生まれ。造形教室主宰後、神奈川県立養護学校、高等学校教員を経て、絵本作家として活動中。町田市在住。

町田市民文学館の五十嵐梅夫・浜藻関連刊行物

●翻刻『八重山吹』－武州大谷村　女流俳人五十嵐濱藻の連句集－（五十嵐濱藻・梅夫研究会／編著　2012年　560円）
●翻刻『草神楽』－武州大谷村五十嵐梅夫の連句・発句集－（五十嵐浜藻・梅夫研究会／編著　2015年　1000円）
●五十嵐祇室・梅夫・浜藻来簡集－附　五十嵐家三代（祇室・梅夫・浜藻）全句集及び年譜稿－（五十嵐浜藻・梅夫研究会／編著　2018年　400円）

町田市民文学館では、五十嵐梅夫・浜藻が板行した連句集などの翻刻を刊行しています。町田市立図書館の貸出カードでお借り頂けます。

また、販売も行っております。お求めは文学館カウンターまたは通信販売をご利用ください。通信販売の詳細はホームページをご覧頂くか、電話でお問い合せください。

【主な寄贈定期刊行物】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク（山の文芸誌）」「三田文学」
詩　誌：「璞（あらたま）」「構図」
短歌誌：「青垣」「歌と観照」「開耶（さくや）」
「日本歌人クラブ 風」「玉ゆら」「はなさい」
俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺（あふりね）」「谺（こだま）」
「都市」「風土」「波」「俳句界」「八千草」「暦日」
その他：「多摩のあゆみ」「隣人」

没後四〇年
町田ゆかりの作家・桜田常久と桜田文庫

当館では長らく町田に在住した作家桜田常久（一八九七―一九八〇）の没後三〇年に「芥川賞作家桜田常久展―町田の戦中・戦後を生きて」を開催しましたが、今年は没後四〇年を迎えることになりました。

桜田は一八九七年、裁判官だった父の赴任先、大阪に生まれ、第四高等学校（現在の金沢大学）を経て、一九二三年に東京帝国大学の独逸文学科を卒業しています。在学中から同人誌に作品を発表していますが、日本大学予科や明治大学予科などに在職中も、ドイツ文学や演劇学等を教えるかたわら、小説や戯曲などを発表、またドイツの戯曲などの翻訳にも取り組んでいます。

一九四〇年に発表した「薤露の章」は芥川賞候補作品となりますが、結局落選し、翌年、「平賀源内」により芥川賞を、続く「従軍タイピスト」で野間文芸奨励賞を受賞しています。

一九三一年には半農生活を志し、町田町本町田に五反五畝の農地を購入して鎌倉から転居、以後亡くなるまで、五〇年近くを町田で過ごしました。日大や明大を辞職した後は農耕と執筆に専念する生活を送っています。

戦前には多くの作品を発表する一方、海軍報道班員として徴用され、フィリピンやボルネオ方面に派遣されています。帰国後は各地で報告の講演会を行い、戦意高揚に一役買ったことで、敗戦を迎えると、桜田は自らの戦争責任を問い、しかし「自分で自分を罰する」ことの難しさを吐露しています。

戦後、彼は文壇とは距離を置き、農民運動に没頭、農民組合を組織し、農地解放に尽力することになります。また地主派に対抗して、戦後の第一回町田町長選挙に立候補しますが、結果は惜敗。しかも地主派から選挙違反（戸別訪問）で訴えられ、桜田をはじめ農民組合の幹部が根こそぎ勾留される中、農地の調査が行われることになりました。

桜田はこの頃の農民運動などを題材にいくつかの作品を書いていますが、これらは小説の形をとってはいても、当時の町田の農民運動や農地改革に関する貴重な証言となっています。

その後、彼は農協の組合長や町田町議会議員、農業委員会委員、農事調停委員などを務めますが、還暦前後頃から再び小説や民衆史の執筆に精力を傾けるようになり、『安藤昌益』『画狂人北斎』『山上憶良』『首なし被葬者の謎―私見・高松塚古墳』などを刊行していきました。『画狂人北斎』は上巻・中巻を刊行したところで、桜田が亡くなったため、下巻は刊行されず、結局未完に終わっています。

一九八〇年三月に亡くなった桜田は享年八三。桜田と親交のあった青柳寺の住職八幡城太郎は、霊前に「さくら咲くを待たざりし天寿といふべしや」の句を捧げています。

＊　＊　＊

桜田の関係資料は二〇〇二年六月に当館に寄贈され、桜田常久文庫として保管されています。旧宅を取り壊す際、桜田の書斎（万木草堂）に残されていた資料をご遺族が一括して寄贈してくださったものです。

桜田は小説家にして独文学者、歴史家にして農民運動家、とさまざまな顔を持っていたため、桜田文庫の資料は小説・戯曲・翻訳等の原稿類、創作メモ、民衆史などの研究論考、新聞切抜き、書簡、写真、遺品などと多種多様です。また熊本の下級武士出身である両親の家の資料も伝存しています。このほか図書・雑誌の蔵書も相当量ありますが、約三〇〇〇冊の図書（和書）に関してはインターネットでリストを公開すべく、現在準備を進めている段階です。

（司書　安藤陽子）

ことばらんど お宝紹介

町田市民文学館では、2006 年の開館以降、町田ゆかりの作家の自筆原稿や旧蔵品、絵本の原画などをはじめ様々な文学資料を収集してきました。その収蔵品の中から、市民の皆様にぜひご覧いただきたい“お宝”をサロンにて順次公開しています。

桜田常久展（展示中～3/15）

お宝紹介第 10 弾は、芥川賞作家・桜田常久展です。桜田は 1931 年から約半世紀を町田で過ごし、2020 年３月に没後 40 年の節目を迎えます。貴重な資料の数々を３期に分け展示いたします。

お宝紹介展示（サロン）今後の予定

（原稿・原画保護など諸般の事情により変更される場合もあります）

ことくん
©中垣ゆたか

●桜田常久展（展示中~3/15）

第１期：1/7～2/2「桜田常久と芥川賞」
第２期：2/4～3/1「町田での生活と農地改革」
第３期：3/3～3/15「最後の小説『画狂人 北斎』と晩年」

●わたなべゆういち絵本原画展（3/17~4/5）

らんちゃん
©中垣ゆたか

市民の皆様の文学作品をご寄贈ください

町田市民文学館では、市民の皆様が著した文学作品（詩歌、小説、エッセイ、児童書や同人誌など）を収集・保存しています。ぜひご寄贈ください。
また、勝手ながら、貸出用と保存用の２冊をご寄贈いただけますと幸いです。今後とも市民の著作の収集に努めてまいりますので、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

「町田の文学」第 45 号　2020 年 2 月 1 日発行
編集・発行／町田市民文学館ことばらんど
〒194-0013　町田市原町田 4-16-17　TEL 042(739)3420
FAX 042(739)3421

★文学館公式ツイッター
Twitter@machida_kotoba

＊この冊子は 500 部作成し、１部あたりの単価は 125 円です（職員の人件費を含みます）